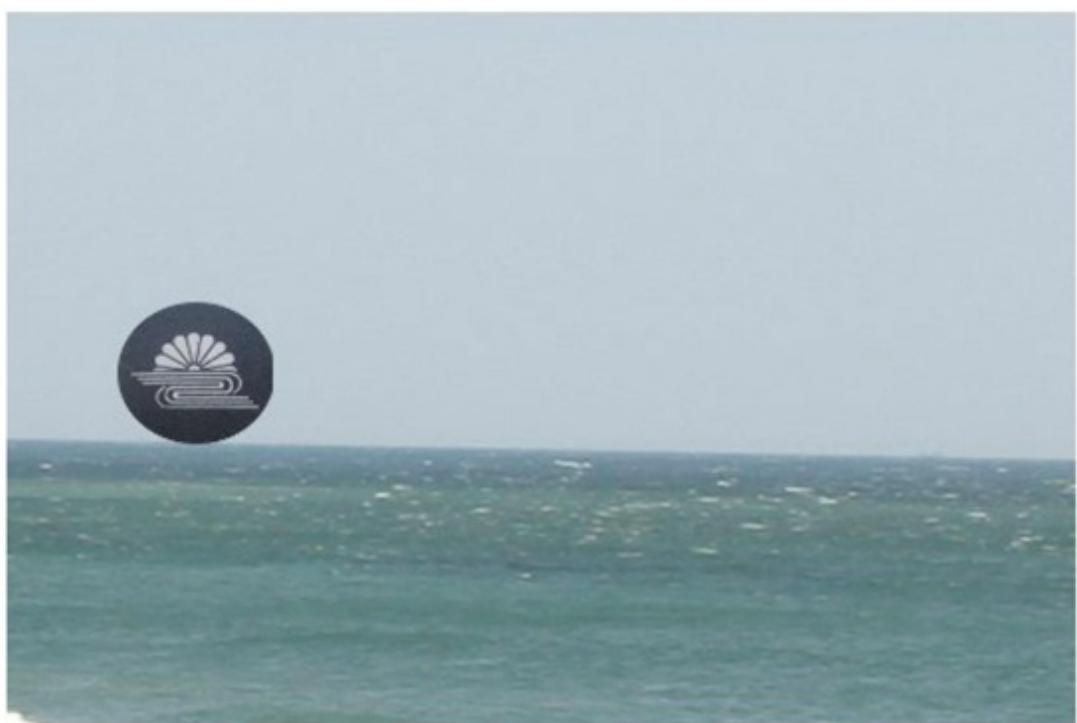


天權法理非

木村 長門



非理法權天　一水は流るるー

【非と云は無理の事也、理と云は道理の事也、法と云は法式也、權と云は權威也、天と云は天道也、非は理に勝つ事ならず、理は法に勝つ事ならず、法は權に勝つ事ならず、權は天に勝つ事ならぬ也、此五つを能弁ふべし】

—貞丈家訓— より

一 昭和の世紀

「右三〇度、航跡が見えます！」

井上少尉は後ろに座る本郷一飛曹からの声にその方向を見た。雲の合間から航跡が見えた。一本、二本、三本とその数は増えていった。そのウエーキの長さから二〇ノット以上

の速度で航行中と思えられた。

「空母がいないか確認しよう」

高度は六〇〇〇ftで速度は二三〇ノットで飛行していた。雲が多く確認が困難だったの

で雲の下に出た。高度は四五〇〇ftであった。

「敵機に注意しろ」

大艦隊が見えた。眼に飛び込んでくる艦船の数はざつと20隻はいるようだった。その中で三隻の大型空母が確認できた。

「少尉、下方よりグラマンがきます」

「大山、離脱だ！本郷、敵空母発見の報告だ」

「はい、打電します」

「少尉、左後方より別のグラマンが接近します」

「あの雲に入れ」

前方の高度五千位に少し大きな雲の塊があり、それに向けて一目散に速度をあげた。

偵察機の「彩雲」には応戦する武器は積載していない。頼みは速度を利しての離脱だけである。コルセアとは速度は同等だが、グラマンよりは優速である。でも最高速度までには少し時間がかかる。グラマンは速度をつけての邀撃である。徐々にその差が詰まってきた。

「打電完了しました」

「よし、本郷！グラマンの様子を見ろ」

本郷一飛曹は後方を見た。ズングリとしたグラマンが一機確認できた。まだ距離が少しはあるように見えたが、しばらくすると両翼がチカチカ光った。

「撃つできました」

曳光弾が機の右側をササッと通り過ぎていった。井上少尉は左に機を少し滑らして機首を下げた。機の速度はもうじき三〇〇ノットを指そうとしていた。しばらくするとグラマンは追撃をあきらめたようだった。

「敵機反転しました」

三人はほとんど同時に大きな息をついていた。

米機動部隊は大型空母十隻を含む六〇隻からなる大部隊で三月一八日から二一日にかけて九州から四国と奥の海軍基地に空襲をかけてきた。日本海軍航空部隊は全力で邀撃するとともに米艦隊に波状攻撃をかけるとともに特別攻撃隊を発進させた。

一九日は松山の源田実大佐指揮の三四三空の紫電改が米艦載機を邀撃し、五十機以上の撃墜を報じ、久々の大戦果に沸いたが、敵の数はあまりにも多く攻撃を阻止するまでには至らなかつた。

一八日からの米艦隊に対する攻撃は空母、戦艦などを一〇隻以上を擊沈破したとの状況判断から米艦隊は沖合に退却中との見方であり、偵察機の発見報告は退避中の米機動部隊であると見て、虎の子部隊の神雷部隊を出撃させることとなつた。

しかし、実際は空母フランクリンが大破炎上して死傷者約一千名を出し、ワスプが中破したにすぎなかつた。ビッグEのエンタープライズは二度も特攻機の命中を受けたが、損害は軽微で戦列に留まつた。

神雷部隊は昭和一九年一〇月に発足編成された特別特攻部隊で、一式陸攻一八機と大金物と秘匿名称で呼ばれた桜花で編成されたいわば特殊部隊であり、援護の戦闘機隊も配下に入つてゐた。正式名称は第七二二海軍航空隊といい、司令岡村基晴大佐、飛行長岩城邦広少佐、飛行隊長野中五郎少佐が任命された。航空隊として特別攻撃隊を編成する始めてとなつたが、米軍のフィリピン侵攻が予想以上に早く、実際にはマニラのマバラカット基地での神風特別攻撃隊の編成攻撃が先に行われ、こちらが有名になつてしまつた。

七二一空は連日来るべき日に備えて連日猛訓練が行われた。特にその特攻兵器である「桜花」は水中兵器である人間魚雷「回天」とともに究極の兵器といえた。母機となる一式陸攻に吊下されて目標付近まで達し、切り離し滑空降下して敵艦に体当たり攻撃を敢行する必殺の兵器である。頭部には一・二・三の爆薬が装備され大型艦をも撃沈する。

桜花を考案したのは大田少尉のアイデアから生れた。最初は当然必殺兵器の開発はしりぞけられたが、戦局が悪化するに従い、これという方法も見つかず、また大田少尉の熱意にも押され、開発が決まつたのであつた。後部には滑空を補助するためのロケット推進装置も装備されたが、後にはこれを発展させ滑空距離を伸ばすタイプ、カタパルトで発進させるタイプが開発された。

昭和二〇年一月になると、神雷部隊は九州鹿屋基地を中心にして、来たるべく決戦の日に備えて攻撃待機態勢となり、第五航空艦隊が編成されるとその傘下に編入された。

偵察機からの敵部隊発見の電報を聞いて鹿屋基地の第五航空艦隊司令部では出撃や否や作戦会議が開かれた。発見場所までは三〇〇海里以上距離はあり、桜花を吊下しての行動半径限界であり、連日の空襲で援護の戦闘機も数が少ないことから、攻撃を中止するしかないというのが判断であつたが、宇垣司令官は「今使わずしていつ使うのだ」という決意に部隊は出撃と決まつた。

陸攻隊の指揮官は野中五郎少佐で二個中隊一八機、桜花は三橋謙太郎以下一五名の一六機であり、援護の戦闘機は神雷部隊の三〇機と他の部隊から二五機が加わることになつた。もっと護衛機を出したい気持ちではあつたが、連日の戦闘で満足に飛べる飛行機があま

りにも少なかつた。飛行場には野中少佐以下の陸攻搭乗員一三七名、三橋大尉はじめ一六名の桜花隊員、援護の戦闘機隊員が整列して出撃の時を待っていた。

飛行場には「非理法權天」の幟が高々と掲げられていた。この幟はその七〇〇年も前に五月の青空のもとにはためいていた。今や必殺の時が訪れたのだ。

飛行機の発動機の始動が始まり、ゴウゴウという独特な音が周囲に響き始め、そのプロペラの起こす風で砂煙が舞い始めていた。

「かかれつ！」

搭乗員は一齊に愛機に向かい走り出していた。野中少佐は愛機に乗り組む前に「湊川だ！」と言い残して機上の人となつた。野中少佐機は轟音を轟かせ滑走を始めた。

二 神が告げし者

約七〇〇年前、現在の神戸市兵庫区の湊川の地でこの「非理法權天」の幟をなびかせて戦いに望む武将がいた。楠木正成である。大敗を喫して九州に落ちていた足利尊氏が勢力を挽回して上京を開始し、京の地を目指していた。それも快進撃で、京にとって一番頼みとなる北畠顎家は東国にあり、名和長年は山陰道にあり、新田義貞の軍勢は連戦で疲労困憊であり、新田軍が約二万、楠木軍が僅か七〇〇という兵力で迎え撃つ予定であった。対する足利軍は三〇万とも五〇万とも報告されていた。

林立していた菊水の「非理法權天」の旗印がゆっくりと動き始めた。正成が死を決して望んだ戦いが始まろうとしていた。

正成は尊氏の旗印を眺めながら自分の来た道を脳裏に思い浮かべていた。

正応元年（一二八八）十一月京都御所で一人の皇子が誕生した。後宇多上皇の第二皇子で、尊治と名付けられ祖父龜山上皇の元で養育された。しかし、第一皇子邦治親王が一三〇八年（徳治三）八月に死去したため、翌月皇太子となり、一〇年後の一三一八年には後宇多天皇のあとを受けて即位し、一三二一年には政務を委譲されるや天皇親政を目指して政務に励むこととなつた。学才に長けていた後醍醐天皇は文武を奨励する方針をとり、有能な人物が側近として固められていった。もともと儒学への関心が深い天皇の元へは、吉田冬方や日野資朝、日野俊基が抜擢された。

親政を断行する天皇へは当然鎌倉幕府よりの圧力がかかり、その圧力を排除することを

痛感した天皇は幕府打倒をする必要があると思い始めていた。その思いは徐々に募り、志を同じくする人々は天皇の下に集まっていた。幕府の目を欺くためにその集まりは無礼講という遊宴の中で行われ、参加者は衣冠を着けず、美女をはべらせ酒を酌み交わす中で密かに計画は練り上げられていった。参加者は、花山院師貢、四條隆資、洞院実世、日野俊基、僧遊雅、足助重成、多治見国長、土岐頼兼らであつた。

後に正中の変といわれた陰謀である。蜂起決行の日取りは九月二三日の北野祭の当日と決められた。六波羅が手薄になるのは確実だったからである。ところが、事態は急展開を向かえる。無礼講参加者の中に幕府に通じるもののがいて、すべてが六波羅の察知するところとなり、十九日に六波羅の幕府軍は京に集まりつづつあった討幕軍を急襲し、自刃または流刑となり、計画は立ち消えた。追求を受けた後醍醐天皇は討幕の密議などありえぬし、自身は関係ないことだと主張した。

後醍醐天皇の気持ちはまだまだ血氣盛んであった。洛中の由緒ある寺院では密かに幕府調伏の護摩を祈禱していた。幕府も執権北条高時が病気を理由に執権を辞した後に跡目相続が表面化し、混乱を招いていた。天皇はこの時を逃すはずはなかつた。一三三七年には皇子尊雲を天台座主として比叡山に送り込み武将集團である僧兵を味方に誘引しようと図つた。またもや討幕の計画は実現に向けて動き出していた。

文観なる僧は、後醍醐天皇と密接に交流し、盛んに幕府呪詛の祈禱をおこなつていた。文観は修驗者としての経験も積み、独特なパワーをも身につけていた。そして、山岳を渡り歩いたおかげで膨大な人脈をも持つていた。文観の直弟子の中にまた傑出した修驗僧がいた。羅讐と名付けられた僧であつた。まだ二〇代ながら文観とは違う秀でたパワーを持っていた。

後醍醐天皇はある夜夢を見た。それはまるで神のお告げのように感じた。二人の童子が夢の中に現れ告げた。

「この広い天下に暫くも御身を隠されるべき所なし。ただしあの樹の陰に、南に向へる座席あり。これは帝のために設けた御座ゆえ、暫くこれに御座候べ」

天皇は文観を読んで夢占いをさせた。

「この夢をいかように思うか？吉凶のお告げや」

「さてさて、何でしようか・・うん、木の南と関係すると考えると」

「文観様」

「羅観いかがした？」

羅観は木の南でふと思つたことがあった。

「くすのき、楠では」

「おう、そうじや、おるのう。河内の楠木正成か」

「はい、一人おります」

「かの丈夫はいかなる人物じや」

天皇はその楠木なる名前に興味を持った。

「最も信頼たる悪党でござります。神が推したのも何かの縁というもの。彼ならば忠を尽くしてくれましょう」

「一度会いたいものよ」

「是非に上洛させましょう」

「羅観よ、後ほど書状をしたためるゆえそれを楠木に渡してくれぬか」

「はい、都に帰るときには同道して参ります」

羅観は文観の書状を懷に入れて河内に向かつた。河内は東と南が山に囲まれ、特に南は吉野山、金剛山、高野山へも通じており、修験僧が行き交う土地でもあり、また、数多の小土豪が存在する土地でもあった。その中でも楠木氏は家系も古く、摂津から和泉にかけての近隣諸国にまでその名は聞こえており、楠木の頭目が声を發すれば近隣諸国の土豪は集結するほどの存在になっていた。羅観も修験僧だったときに、高野山や金剛山から吉野を巡察していた折、幾度か楠木正成の世話をなつたことがあつた。羅観は2年振りに正成の元を訪ねた。

「主殿、羅観殿が訪ねて参りました」

屋敷の中で三歳になる子供に読み書きを教えていた。正成の長男のちの正行である。正成は嫡男を連れて客間に現れた。

「羅観殿、久しううござる。息災でござつたか」

「はい、意氣軒昂でございます。正成殿も息災の様子なによりです」

羅観は隣に座る子が気になつた。

「そのお子は？」

「二年前に一度羅観殿に抱かれましたかな」

「お、あの時の。大きくなり申した。時の移り変わりは早いものです」

「左様、時が経つのは早うござる。この間まで乳を飲んでおり申したが、もう一端の口を利きまする」

「正成殿、今日は文親様からの文を届けに参りました」

正成は文を受け取ると首を少し左に傾けて読み始めた。読み終える頃には唇を噛み締め陰い表情になっていた。

「帝が伺候せよと促しているようだな」

「はい、是非とも面会したいと」

「用件は、だいたい推測がつくが。久ぶりに都に足を運ぶか」

「帝もお喜びかと」

「支度をいたすゆえしばらくお待ちくだされ」

後醍醐天皇と楠木正成との出会いは近づいていた。

三 元弘の変

正成は羅襪とともに上洛した。まず文親の元を訪ねた。

「これは正成殿、久しいことよのう」

「文親殿、まことお久しうござる」

と正成は両手を広げて文親の近くによつていた。

「正成殿、帝が召されたのは他でもない。夢の中で楠のお告げを賜つたが為なのだ」

「帝の夢に某が現れたと」

「いや、お主が現れたのではなく、楠という性を持つ人物が帝の力になると神が告げられたそうな」

「某も神に認められる存在となり申したかな」

「明日帝とご拝謁となります。朝迎えに参ります。それまでゆつくりとお休みなされ」「ご配慮うれしき限りでござる」

正成は最初なかなか寝付けられなかつたが、いつの間にかぐっすりと寝ていた。翌朝、空は青く澄み渡り、輝く太陽が昇り始めた。正成は眩しく光る太陽をしばらく見つめていた。帝は何を考えているのだろう。ふと考えていた。

身支度を整えていると、文観が迎えに来た。二人は御所へと向かった。

正成は正座して帝の出座を待っていた。帝が謁見の間に現れ、すだれの向こう側に座つた。正成は平伏して迎えた。

「そこ」もとが、河内の楠木正成か」

後醍醐帝が落ち着いた響きのある声で聞いた。

「はい、楠木正成でございます。此度はご拝謁を賜り恐悦至極に存じあげます」

正成は平伏したまま答えていた。

「うん、そのままでは顔が見えぬ。おもてをあげよ」

「は？」

正成は埋めていた顔を少しあげた。正成には帝の陰しか見えなかつた。

「精悍な顔をしておるの。正成、今の世情をどう思うか」

「幕府の威光も衰え世も乱れております。諸国にはこの時とばかり悪行がはびこつております。庶民は新しい世を待ちこがれています。天狗も現出したと聞き及んでおります」

「そう思うか。また、天狗と申したがその正体は何じや」

「正体はそれがしにもわかりません。が、幕府に反するものと思ひます」

「正成、予はこの国の治世を鎌倉に任せて置けぬ。予自ら親政をとろうと思うておる。正成は力を貸してくれるか」

正成はしばらく考えていた。静寂な時間が過ぎた。

「まさしげ！」

「帝の御為ならば、この命捧げましよう」

正成にとって帝からの申し出は渡りに船であった。楠木一族は本当の姿は悪党の棟梁的存在であり、他国の莊園とか武装兵力を使って荒らし回っていたからであり、幕府六波羅探題からは征伐を受ける可能性もあったのである。勅旨を受けたならば、正面きつて幕府方と戦うことでもでき、味方する豪族も期待できたのである。事実、鎌倉は執権の権力は皆無に等しい状態であり、討幕運動はたやすいと思われた。

謁見が終わった正成は文観より、討幕の密議がある事を仔細に聞いた。その密議に文観も羅観も関わっていることも聞いた。

「文親殿、密議の顔ぶれに不審な者は？」

「いや、いずれも帝の親任の厚い者ばかりじやて」

「ならばよいが」

だが、その密議は側近により密告され發覚することになる。

前権大納言吉田定房は帝に忠誠を尽くす格好を見せてはいたが、裏では六波羅からの多大な恩恵を受けて、幕府の犬の役目も果たしていた。8年前の討幕の密議も内部者の裏切り行為で発覚に及び、失敗した経験があった。その経験から幕府は朝廷の有力者を抱きこんでいたのである。

「討幕の密議はどこまで進んでおるか？」

「帝は鎌倉の情勢を見ており、いつでも蜂起できるようと味方となる武士を近隣諸国に探しております」

「討幕の企ては明らかなる事実か？」
「確かに」

討幕の事実を知った六波羅探題は火急の使者を鎌倉に送った。

「此度こそ首謀者は帝に違いない。すぐさま一味を捕縛せよ」

幕府は長崎高貞に上洛をして、帝以下の捕縛するよう命じた。

長崎高貞は上洛する際に、街道の諸大名に戦支度を命ずる幕府からの書状を渡しながら進んだので、到着するには時間を要したが、到着するや六波羅探題は密かに密議の参加者を逮捕する行動に出た。日野俊基や円鏡、文親らは油断している所を捕縛され連行された。文親が逮捕されたことは、たまたま外出して難を逃れた羅親により、後醍醐天皇の耳に伝わった。

「何と、また事が六波羅に露見したと？」

「露見したのは、多分定房が密告に及んだためと思われます。今朝定房が六波羅に逃げ込んだとわらわの従者が見届けております。幕府の手もまもなく宮中に回りましょう」と万里小路藤房が言った。

「ウツー」

帝は小さく怒りの唸り声をあげているようでもあり、悔しさのあまり声を発していたよ

うでもあり、しばらく手を拳に握り締めて震わしていたように藤房には見えた。しばらくして藤房は言つた。

「帝、直ちに脱出して何処に隠れ遊ばしますよう」

「すぐ支度をいたそう」

六波羅も関係者を一網打尽に捕縛して、残るは後醍醐天皇らと側近だけとなり、幕府からも捕らえて遠国に流罪とするよう書状が届いていた。しかし、鎌倉でも得宗家を巡る争いがおこり、六波羅でもその混乱のため、逮捕の手続きが日延びすることもあった。円觀と文觀は流罪、日野は鎌倉送りとなっていた。その一時をついて帝らは京より脱出した。行き先はどうあえず比叡山をめざした。比叡山延暦寺の僧徒を味方につけて六波羅と戦おうと計画していたからである。しかし、帝は途中でふと思つた。六波羅に露見しているならば、延暦寺の事は当然熟知しており、何か対策を練つているかもしれないと思いつき、比叡山に行くのは中止して、東大寺に行き先を変えた。そこで、末寺の笠置寺がある笠置山の方が地の利がよいと結論に達し、一行は笠置寺に入り挙兵の事を近隣諸国の豪族に知らせるとともに、参陣の呼びかけをおこなつた。

朝廷対幕府の戦いの火種はついた。

四 隠岐への配流

幕府方は最初比叡山に向かい、比叡山の僧兵と戦いに及んだが、天皇は脱出して笠置山に陣を移したと聞いて、六波羅の軍勢は笠置山に向かうとともに、東国からの幕府援軍も笠置山周辺に向かっていた。天皇の下にも大和、河内、伊賀などから兵を率いて集まつていた。羅觀は天皇が笠置山に向かつたことを楠木正成のもとに知らせに走つた。

「正成殿！」

「おう、羅觀殿。おい、誰か水を持ってまいれ」

羅觀は息を整え、正成の従者が差し出した水嚢をぐいぐいと飲みほした。

「正成殿、帝は笠置山にお移りになられました。近在の武将が笠置に向かつております」

「左様か。笠置に籠もられるか」

「御意」

正成はゆっくりと左右に動きしばらく考え込んでいた。

「よし、出陣いたすぞ。支度をいたせ」

「は？」

「羅観殿、帝に伝えられよ。この正成、赤坂に立て籠もり、幕府と戦うと」

「えつ？ 笠置へは」

「幕府は大軍、今笠置に皆集まれば袋の鼠同然。ここは、敵を分散せねばなるまい」
羅観はなるほどと思った。帝の兵は幕府軍に比べればあまりにも少ない。集中させれば一気に一網打尽の臺き目にあうことは必定であった。正成は兵法のない帝の軍では幕府と渡り合えぬし、勝ち目はない判断したのであった。

幕府軍は徐々にその数を増していく、十万の大軍となっていた。幕府軍は準備もせずに攻撃を仕掛けたので、最初は笠置山に立て籠もる僅かな軍勢にあしらわれた。

「後醍醐帝は謀反を起されたのじや。新しき帝は都にこ座しますぞ。遠慮はいらぬ。
即刻捉えよ！」

「敵は過小ぞ。慌てるでない」

しかし、そんな幕府軍に嫌な知らせが届いたのである。

「河内赤坂城に楠木正成なる者挙兵して討幕を宣言し籠城した由にござります」

「何？ 河内赤坂と。うーん小頃な。兵はいかほどじや」

「およそ五百」

「こ、五百だと？ 兵を河内に回し一気に踏み潰してしまえ」

十倍の幕府軍が赤坂城へ向かった。山城の一角には城砦の一部が麓から望見できたが急ごしらえの城で野武士たちが幾ら集まつても幕府の精銳にはひとたまりもあるまいと誰もが信じていた。

「一気に攻め上つて打ちのめせ！」

「ウォー」

と、一齊に崖を上つていったが、途中まで達すると城兵が山上に姿を現し、崖下にくくりつけてあつた丸太の麻縄を切り落としたり、岩を落とす戦法に出た。

「これでも食らえー！」

ゴロゴロと落ちる丸太と岩に、攻めての幕府軍は麓に蹴り落とされていき、けが人が続出した。攻撃は一旦中止され、態勢を整えて再度攻撃に繰り出した。次は同じ手は食わぬし落とす丸太や岩は少ないと説んだからだ。

いま一度攻撃の為に崖を登り始めた。

「田舎武士にどれほど」のことが出来ようぞ！一気に攻め立てよ」

断崖上でこの様子を窺っている正成の軍勢はゆとりのある表情をしていた。いつでも「され」という氣概である。

「例の用意は出来ておるか？」

「はつ、ここに幾らでも」さる。すいい悪臭で」さる」

「よし、皆に持たせ用意させよ」

皆は桶を持って大きな甕からすくいあげていた。それぞれの口や鼻は布で押さえていた。

幕府の軍勢は一気にあがろうと必死に動いていたが、上からは異常にゆっくりとした動きにしか見えなかつた。姿形がだんだんと大きくなってきた。

「よし、放て！」

「これでも食らえッ！」

と、糞尿をこぼすばかりに落とされたからには、幕府軍の将兵はそれを頭から被つたりしたら、もうたまつたものではなかつた。

「うえつ、何だ？これは！」

「人糞だ」

「くせつー！」

「たまらぬ匂いだ。引けい」

その匂いに攻撃意欲も途絶え、幕府軍は再び麓にとつて返した。

一方、笠置山を包囲する幕府軍も立て籠もる天皇方に手こずつていた。

「何かいい案はないのか？」

その日はあいにく雨模様で戦も実質的に中断していた。

「拙者にいい案がござる。日も暮れても雨が続くなら、敵も油断しておるはず。そこを僅かな兵を持って忍び入り、寺に火を放ちます。その混乱をみはからい、総攻めを行い、天皇一行を捕縛すれば、もはや手向かいする者はおりませんまい」

「この際運を天に任せ決行してみるか」

少数からなる選抜隊を作り笠置山を登らせた。

「敵はこの風雨で油断しておる。見張りもおらぬようじや」

「火を放つて闇の声をあげよ」

数箇所から火の手があがつた。と同時に夜空に狼煙があがつた。

「敵だ！火が出たぞ！」

籠城している将兵は連日の戦闘で疲労困憊しておりこの風雨では戦はあるまいと油断して寝入つていただのである。

「帝を早くお連れせよ」

山上に登った幕府軍は天皇一行を探したがなかなか見つからなかつた。

しかし、2日後逃避する道中で発見し、包囲した。帝はもはやこれ以上の抵抗はせず、捕らわれの身となつた。

その頃赤坂城に立て籠もる楠木軍は笠置山が落城して帝が脱出したことを知つた。正成は笠置山を包囲していた大軍がいずれはここに押し寄せるに判断し、さすがに持ちこたえることは不可能と考え、いかに味方に損害なく脱出するかが問題となつた。包囲する幕府軍は戦勝気分となつてはいたが、長期化する籠城に嫌気もさしてきていた。

正成は闇夜にまぎれて周囲に散在する敵味方の死体を集めさせた。そして山上を炎に包みこんだ。その隙に砦から麓へ脱出して姿をくらました。幕府軍は翌日山上にあがり、焼けただれた多くの死体を発見した。笠置山が落ちたために自刃して果てたと考えた。

幕府はこの戦乱の終結確認し、後醍醐天皇は隠岐に流罪とした。従者は千種忠顕らと阿野廉子であった。

しかし、火種はまた灯りつつあつた。

五 正成再起

後醍醐天皇等は4月に隠岐に護送され、造営された黒木御所に幽閉の日々を送ることとなつた。討幕の世情は摘み取られたよう見えたが、半年と経たない内に燃ぶり始めた。

天台座主に昇つた大塔宮護良親王は後醍醐天皇が挙兵した當時、叡山の僧兵を率いて幕府軍と戦いに及び、その後は笠置山に立て籠もつて応戦したが、圧倒的は兵力の前についに陥落し、天皇は脱出後捕縛されたが、護良親王は脱出し成功し、熊野から十津川を経て吉野へと歩を進め、山深い吉野山中に立て籠もつた。この間に護良親王は各地の武士に令旨を出して参陣を促した。

一旦赤坂城を炎上させて行方をくらました楠木正成は再起のときを見計らつて、その護良親王と正成との連絡を蜜にしたのは、羅觀らの活躍があつたからであつた。羅觀は

文観の忠告に従い、修驗者の足と情報を活用して距離が離れていても大丈夫なように連絡を頻繁におこなっていた。

正成は再起を図るため身を潜めながら情報収集と同志を集めていた。そして先日まで立て籠もる赤坂城を見き得るところに密かに集結を始めた。そんな場所に羅観が姿を見せた。秋の気配が濃くなるときであった。

「正成殿、お久しうござります。息災のご様子なによりと存じます」

「羅観殿こそ、東奔西走のご様子。関心にいたりというもの」

「いえ、わが師文観がかような次第となり、そのご意志を窺いだまでございます。ところで、正成殿。大塔宮様が決起する準備が整ったと伝えてくれとのお言葉でございます」

「おう、大塔宮様がそう言ったか。宮様はいまいかがしておる」

「吉野の山中で今か今かと時機を待っております」

「羅観殿、その時機はまもなく起き申す。羅観殿が吉野に着く頃には、再びあの城に菊水の旗が聳えております」

正成は赤坂城を指差し、その眼差しからはすごいまでの霸氣を羅観は感じていた。

（正成殿なら必ずやり遂げてくれよう）

正成はまたここ数ヶ月の間にこの辺り一帯の有力諸将に砦を密かに構築させていた。赤坂を再び奪取すれば、一段と堅固な城砦として幕府軍に耐えうると考えられた。ましてや物見の報告では、赤坂の砦は幕府軍により堅固にそして大きくなっていることがわかつた。

「しかし、守る兵卒は僅かばかり」

正成の心は決まった。

「赤坂を奪い返す！」

正成は部下を三手に分けて密かに山麓を登り、城へと近づいていった。元々正成の城だった所である。どこをどういけばどこにたどりつくか簡単だった。一斉に襲撃した。急襲された城兵は抵抗する間もなく、討たれるか捕縛された。一部は急斜面を雪崩のように逃亡していくた。

「よし、麓に集まりし兵にすぐさま城に入るよう伝えよ」

「正成殿、やはりこの城は前よりも数段堅固になつております」

正成は絵図面を取り出した。それは、この城を含めたこの一帯の城砦化のものだつた。

「直ちにことごとに砦を設けよ」

正成は絵図面を指差し砦構築の指示をおこなつた。それは、南北を縦断し、敵を遮断するに的確なものであった。

羅觀は吉野山に籠もる護良親王を訪ねていた。

「羅觀、この山深い所まで大変であつたろう」

「いいえ、それよりも大塔宮様、楠木殿は再び挙兵されましょう」

「楠木が、起つか」

「某がここにつく頃には、赤坂の城を奪つてゐると」

「さようか、ならばこの時を逃すことはない。六波羅の様子はどうじや」

「はっ、宮様と楠木殿には懸賞の立て札が立てられましてござります」

「わしに懸賞と！ふふふ、笑わせてくれるわ。六波羅も相当困惑しておるのじや。もう一押したそう。誰か、兵をすぐさま集めよ！」

「はっ」

幕府のお触れは二人の重要人物に絞られていた。

一、大塔宮を捕縛または誅殺した者には近江国麻生庄を賜る

二、楠木正成を誅殺した者には丹後国船井庄を賜る

この触れを見て幕府軍に身を投する者が増えた。幕府軍は二〇万とも三〇万ともいわれる位の大兵力で吉野山と赤坂城を目指した。

吉野山は天然の要害ではあるが、立て籠もる宮方に正成に匹敵する戦術家はおらず、腕のたつ武将が護良親王を守つていただけであり、頼みの僧兵は数の上では幕府軍に比べれば一握りであつたのが、激戦の勝敗を早くした。

だが、半月にわたり必死に防戦した。だが、守るべき兵は続々と倒れ僅かばかりとなつていつた。護良親王もやはこれまでと死を覚悟し、最後の盃を交わした。その時、表で奮戦中の村上彦四郎義光なる者が飛び込んできた。

「大塔宮様、その御具足を脱がせたまひ候え」

と、自らの具足を脱ぎ、親王の身につけている具足と交換した。

「ここは、某に任せ一刻も早く逃れ候え。まだまだ先はござりまする」

「彦四郎、決して忘れぬぞ！」

「早く！」

親王らは、少人数で脱出した。彦四郎は親王が無事に逃れていく姿をしばし眺めていた。
村上義光は迫り来る幕府軍を一身に引き受けるため、櫓に登り天まで届くような声を張り上げた。

「天照大神の御子孫、神武天皇より九五代の帝、後醍醐天皇第三の皇子、一品兵部卿親王尊仁、逆臣のために亡ぼされ、恨みを泉下に報ぜんがために、ただ今自害する有様を見置いて、汝らが武運忽ちに尽きて、腹を切らんずる時の手本にせよ」

脇差をぬくや刃を下腹に突き立て真一文字に描つ捌き、臓物を引き出して投げつけ、抜いた太刀を口にくわえ喉を貫いて絶命した。その光景を見ていた幕府軍の兵士はあまりにもの惨劇にしばし呆然としていた。

親王は包囲網を脱出し、吉野から高野山へと向かつた。

六 隠岐脱出

吉野で護良親王が幕府軍相手に善戦する中、赤坂城でも激戦が展開されていた。阿蘇治時率いる幕府軍は上赤坂城を守る平野将監以下を攻めに攻めた。五日間にわたる一進一退を繰り広げていたが、幕府側が城の水の手を奪い取ったことで、勝敗は決した。

「降伏すれば命は助けてやる」

城兵側はぎりぎりまで戦ったのだから、その勧告を承諾し、平野以下280余名が投降した。しかし、幕府側はこの投降勧告とは裏腹に都へ連行して河原で全員の首をはねてしまった。明らかに間違った方針をとってしまった。

正成は上赤坂城の城兵はよく戦い、水源を失ったことで降伏したことを聞いても、予想していたことであり、奮戦を心の中で称えていた。しかし、風聞で全員が斬首されたと聞いて憤りを感じるどもに、楠木軍は結束をさらに強固なものにした。

「皆の者よく聞け！この仕打ちは決して許さぬ。だが、幕府ももう後がないと言う証じや。まだまだ踏ん張れば、討幕の旗印があちこちであがるであろう」

「おうー」

赤坂が落城するころ、後醍醐天皇が配流されていた隠岐では一大事がおころうとしている。

た。隱岐脱出である。

「帝、いよいよ明日決行の日が参ります」

「左様じや。よくよく待ち望んだもの。護良親王はいかがしておる」

「はい、大塔宮様は吉野に立て籠もり幕府と戦をしております。また 楠木正成が赤坂を奪い取り、幕府と一緒に戦を構えていると聞いております」

「うん。明日の手筈抜かりなきよう」

「是非に。全ては天のお導きにて無事に事がはこびましょう」

後醍醐天皇は夜明け海賊の手引きにより、船に乗り脱出した。幕府の監視兵たちは昨夜振舞った酒がよくきき熟睡していた。当然日の出後、天皇一行が忽然と姿を消していることに気がつき、知らせは守護の佐々木清高の耳にはいる。佐々木は即刻追跡して捕縛することを命じ、追跡の船が後を追う。天皇側は追つ手が来ることを予想し、匿船も用意していた。伯耆国福津と名和湊に二手に分かれた。

五艘の船のうち、三艘を福津に向かわせた。どちらを追いかけるか幕府の船は三艘の方を追つて行った。二艘の方に天皇は乗つていた。無事名和湊にたどりついた。湊には海賊衆からの連絡を受けていた名和長年の使者が待つていた。

「帝には、御気色のご様子ご安心いたしました」

「この者はいかなるや」

「はっ、名和長年の側近にて丹波康隆と申します。わが主のもとにてまではこ休息賜りたくお迎えに罷りこしました」

帝の側近の千草忠顯は事前に名和氏の名前は聞き及んでいた。

「帝、この者は討幕に与力せしむると聞いております」

「さようか。予に力を貸してくれるか」

「はっ、是非に。まずはあの御車にお乗り遊ばすように」

帝や阿野廉子らは三台の用意された牛車に乗つた。それは宮中で使うものとは比べ物にならないほど貧相なものであったが、疲れたからだを休めるには馬に乗るよりは十分であった。

「幕府の追つ手の船が見えます。ここは我々で敵を防ぎますゆえ早くわが主の所へ」

圓と氣付いた幕府軍は急遽矛先を変えたが、後醍醐天皇は上陸して姿をくらましていた。

数少ない幕府の追っ手は名和氏の配下の者たちにより一掃された。

名和長年は帝をどこに伴い、立て籠もって幕府軍と一緒に戦を構えるかずっと悩んでいた。

難攻不落な山城はこの近辺になく、そう長くは籠城できる場所は少なかつた。

「兄じや、ここは船上山しかなかろう」

と、出家し大山に入山していた弟が知らせを送ってきていた。

(船上山か？あそこなら攻めにくく守りやすいし、地の利もいい)

長年は一族郎党を集める船山に向かい、陣を構えるよう命じるとともに、自らは途中で丹波らと行幸してくる後醍醐天皇一行を出迎えた。

船上山には大山寺の末寺智積寺があり、長年はそこを天皇の御所として使用することにし、簡単な修築と警備の体制を敷いた。

「帝、幽閉の日々はたいそう辛うございましたでしよう。また船旅と強行軍にてお疲れでしそうから、こちらでゆるりと休息遊ばしてください」

「何をこれしき。予が都に戻れて政を司れるなら、疲れなどないわ。名和とやら、よく力を貸してたもうた。礼を申す」

「もったいのうござります。幕府の政はもはや堕落してござります。帝のお力が必要と、皆々感じて、馳せ参じておるのでです」

「うん。これより綸旨を認めるゆえ、近隣諸国の武士に配り届けてほしい。六条、直ちに綸旨を発しておじやれ」

千草忠頼のことを帝は六条と呼んでいた。

「直ちに準備をいたします」

「申しあげます！」

「何事じや」

長年は突然の口上にビリッとした表情で聞いた。

「隠岐守護佐々木の軍勢およそ三千がこちらに向かつておるとのことでござります」

「？来たか、で、いつじや」

「まもなく陣を構える様子から、おそらくは明日にでも攻めてくると思われます」

「あいわかった」

長年は帝の方を向き直して一礼してから言った。

「では、戦の支度がありますゆえ、座をはずしますが、決して幕府の輩を一步たりとも

「ものに近づけませぬや、安心あれ」

「うん、頼もしいかぎりじや」

長年はあらかじめ近隣から人夫を集めて大量の兵糧米を船上山に運びいれていた。そして、たくさんの方指しを急遽用意させて山上に並び立てて、多くの軍勢がいるかのように見せかけた。名和氏の引率する一族郎党と与力して集まつた兵は約一千五百をこえるあたりであり、幕府軍の半分であった。

幕府軍の攻撃が始まつたのは翌々日であつた。その間の1日が貴重であつた。諸国へ諭旨を持つた使者が旅立つたのである。

七 尊氏挙兵

「正成殿、帝からの親書が届きましたよ」

「帝？ からと。見せてみよ」

「これに」「これに」

正成は親書を受け取ると読み始めた。

「この包囲網の中よう捕まらずに参ったな・・おう！ 何と？」

親書を読み終えた正成は書を右手で持ち、力強く震えるように握り締めた。

「皆よく聞け！ 帝は隱岐を脱出し、ついに決起され、全国に諭旨を奉じられた。吾らは帝を助けんが為、幕府の大軍をここにひきつける必要がある。これからが正念場ぞ」

「おう！」

幕府軍も千早をいち早く落城させ、京へ部隊を移動させたかった。そのために總攻撃を開始したが、いまひとつ士氣があがらない。断崖に梯子を並べ立てていつきによじ登ろうとする作戦いでたが、楠木軍は油を次々とばら撒いたため、梯子がすべり思うようにあがれない。そこにさらに火矢を打ち掛けて火薙めとした。幕府軍の気勢はいっさに削がれてしまつた。

幕府は一時帰国していた足利尊氏に出動を要請した。尊氏は一旦出陣するのをためらつていた。しかし、一転して一族出陣の触れをだした。尊氏は源氏の嫡流であり、八幡太郎

義家の次子義国に発し、代々続いている源氏の名門であった。

嘉元三年（一二〇五）に生まれ、幼名は又太郎。元応元年（一二一九）十五歳で従五位下に叙され、治部大輔に任じられた。北条政権のかなり高い地位にいた。元弘の変が起きた年に父貞氏が死亡した。喪中であつたのに出陣しなければならなかつた。天皇が捕まり乱が鎮圧されたので、一旦帰国した尊氏であつたが、楠木の籠城と天皇の隱岐脱出により再び出陣の沙汰が下されたのである。

足利家には祖義家の置文なるものがあり、それには『我れ七代の子孫に生まれ変わりて天下をとるべし』とあつた。その七代目にあたる時は天下をとることはままならぬ状況において鶴岡八幡に『我が生命を縮めて三代の後に天下を取らせたまえ』と置文して割腹して果てた。その三代目は尊氏だった。尊氏にとつてその時がようやく来たかもしぬと思ったのも当然であった。

千早城に羅観が現れた。僧衣は長旅でかなり薄汚れていた。正成は久しぶりの珍客と会つた。

「羅観殿。久しううござる。大塔宮様どと一緒にざりましたか？」

「いいえ、東国にいっておりました」

「東国？」

「足利尊氏なる人物に会うためです」

「足利といえば、幕府でも今や支柱的存在でござる。それが何故に」

「幕府の土台はもう腐っております。尊氏より後醍醐天皇に尽力を尽くしたい旨の使者が官方に來たのです。その真意を確かめるため拙僧が東国へ參ったのです」

「足利が帝の力となり幕府を倒すというか？」

「御意。今頃は三河の国に入つております。使者が繪旨を賜るために船上山に向かつております」

「うーん。ならば尊氏は六波羅をまず攻め込むであろう。某はそれまで幕府の大軍を二つに引き寄せておかねばなるまい。今しばらく辛抱の時機じやで」

「吾はこのまま大塔宮様の所へ赴き、時機が熟していることを伝えます」

「それがよからう」

「二)武運を祈つております」

「そこ」も「も」

足利尊氏は弟の直義、高家ら三千の兵を持つ鎌倉を出発した。途中三河の吉良の領地に立ち寄り、そこで細川和氏と上杉重能に命じて船上山に急行させ、内応の約束と繪旨の下賜を願い出るよう取り計らった。尊氏はその後何事もないよう京への途を進んだ。

足利尊氏の帰順を聞いた後醍醐天皇はこれ以上な好都合な事はないとの繪旨を使者に渡した。二人が駆け戻って尊氏と合流したのは近江の鏡宿であった。尊氏は天下取りの切符を掴んだのであつた。また、尊氏の前に近江守護の佐々木道誉と現れた。

「尊氏殿、平家の時代はもう終わりでござる。今こそ帝に味方し源氏の嫡流足利の名を天下に指示示すときではござらぬか。貴殿が何もことを起さぬのなら、それがしだけでも帝に尽力をいたす所存」

尊氏はその言葉を聞いて黙つて頷くだけであった。道誉は尊氏の眼を見てその奥に秘められた志を悟つていた。

京の都に入つた尊氏は六波羅探題の北条仲時と時益に挨拶し、その後入京してきた名越高家を訪ね、今後のことを持ち合つた。内応は味方を欺かねばならない。名越は尊氏のそんな裏切りの心は全然感じなかつた。まずは都周辺を荒らしまわつて赤松勢を一掃することに軍議は決まつた。名越は約七千の兵で足利の兵三千とともに久我原に向かつた。高家は花形の紋を織つた綿子を濃い紅色に染めた直垂の上に紫糸の鎧を着け、吹き返しに金銀製の日光・月光の透かし彫りをあしらつた五枚兜をかむつて黄瓦毛の馬にまたがり、腰には鬼丸という黄金造り丸輪の名越家累代の太刀を指し、背には三六本の矢をいれた箭を背負つっていた。なんとも煙びやかないでたちであつた。その姿は遠くからでもはつきりとわかつた。それが命取りともなつた。赤松勢に佐用範家という弓の名手がいた。ひそかに近づいた範家は兜に狙いをつけて矢を射掛けた。見事に矢は眉間に貫いた。即死の状態があつた。瓦角の戦いだが、大将の戦死で名越勢はいっさに崩れ敗走した。

尊氏は遠眼でこの敗走の様子をじっと眺めていた。尊氏が幕府方として戦に参加していたのなら、十分幕府軍の勝利であった。が、内応を決めていた尊氏は何もせずにただ黙つて見ていただけだった。赤松勢もそれを知つていたか、足利軍には眼もくれず名越勢を蹴落とすと凱歌をあげて陣を引き払つた。

尊氏は静まりかえった戦場の陣を引き払うと、京には向かわず丹波国篠村に向かった。この地は足利の領地の一つであった。尊氏は篠村の八幡宮に陣を張ると、近隣諸国に帝への陣営参加を求める書状を発給した。数日して二万騎の兵が尊氏の元に駆寄せ参じていた。機はついに六波羅滅亡へ動きだしていた。

八 幕府滅亡

名越勢敗北の悲報は千早城を取り囲む幕府軍にも伝わっていた。動搖を隠せないのか六波羅へ戻るとして陣を払つていった。しかし、そのままどこかへ逐電してしまった者もいた。

足利尊氏は重臣らを伴い八幡宮に参詣し、源氏再興の願文を神前に捧げた。五月七日寅の刻（午前四時）全軍を三手に分けて六波羅に向けて発向させた。進軍していく道中もその軍勢の兵は段々と膨れあがつていった。嵯峨野を過ぎる頃には5万ともいわれる数に達していた。対する六波羅は六万の軍勢で対抗しようと京に入る道を塞ぐべく出陣したが、士気は明らかに低下しており、各所で打ち負かされ洛中に戻つてくる有様であった。夜にはいり、尊氏は一方だけを開けて包囲網を敷いた。その効果がみえ、闇にまぎれてぞくぞくと逃亡をはじめ、夜が明ける頃には六波羅に残る兵は僅か二千余りとなっていた。

六波羅探題に残るのは北庁長官北条仲時、南庁長官北条時益であった。二人は最後の手段を選ぶしか方法がなかった。

「天皇と両上皇を奉じて鎌倉に向かい、立て直して再び京の地を奪回するしかあるまい」光嚴天皇と後伏見、花園両上皇を伴い、六波羅を脱出する算段である。

「一刻も早く脱出を」

闇にまぎれて脱出を図つたが、しばらくして振り返ると六波羅は早くも紅蓮の炎に包まれていた。洛外に出る頃には夜が明け今度は落武者狩か矢が四方八方から飛んできた。時益は矢が頸部に命中し馬から落ちた。従兵が抱き起こして矢を抜いたが絶命したので、泣きながらその首を切り落としてわからぬ様に土に埋め、従兵も自害して果てた。

仲時は東へと落ちのびようとしたが、行く先々はもう落武者狩の武士がたむろしており、脱出是不可能と思われた。

「もはやこれまでじや。東武士らしく潔よう剖腹して果てようではないか」

「おう、我ら東の心意気を見せてしんぜようぞ」

「では、真っ先に」

仲時はその場に居座ると下腹に刀を突き立てて割腹した。それを見た一族郎党四百数十人は次々と自害して果てた。六波羅探題はあっけなく滅亡した。

その頃関東でも異変が起っていた。尊氏が決起した翌日の八日新田義貞は赤城山山麓上野国新田庄にある生品神社に一族郎党を集結させていた。東の空は明るくなり始めていた。懐より護良親王からの綸旨を取り出して高く掲げて挙し、

「おのおの宣旨を額に當て、運を天に任せてただ一騎になるとも打つて出て、鎌倉を枕に討死すべし」と、明るくなってきた空に響くように言つた。

「おう」

「目指すは鎌倉じやー」

その日の夕刻、利根川河畔で野營の陣を敷くと、越後の新田一族二千名をはじめ、甲斐や信濃の源氏一族が続々と集結してきた。

新田義貞を大将とする2万の軍勢が鎌倉を目指して進軍していると報告があつた鎌倉幕府では大慌てであった。一部は上方に派遣しており総動員をかけても三万しか集まらず、頼りになる武将が少なかつた。桜田貞国を大将として2万を先鋒で差し向け、後詰に金沢貞昌に一万をつけて新田軍を迎え撃つ態勢をとつた。

十一日小手指原で両軍は激突した。日は完全に昇つっていた。鏑矢を合図に戦は始まり、まず矢が数百本も晴れ渡る空を舞つた。それが終わると両軍の騎馬武者が怒濤の如く打ち寄せて刃を交えた。戦いは互角であり陽が落ちて明日の戦いとなり、両軍は一旦退いて兵馬を休め、翌日再び夜明けとともに激戦となり、鎌倉勢は持ちこたえることができずに、退却に移り、分倍河原まで後退していった。そこには北条高時の実弟四郎入道を大将とする新手の幕府軍が陣を構えていた。味方の損害が大きい新田軍は一旦兵を再編した後に攻撃を続行したが、新手の幕府軍を打ち破ることができず、逆に痛手を受けて退却せざるを得なくなつた。しかし、幕府は追撃しなかつた。徒な兵の損失を避けたのだろうが、この詰の一手が翌日の勝敗を決すこととなつた。

新田義貞の陣営に三浦平六左衛門が六千の兵を率いて馳せ参じた。さらに先陣を願い出たのである。義貞は命運を託した。翌朝三浦は兵を密かに幕府の陣営近くまで導くと一気に攻め立った。幕府軍は連日の激戦で物見を残していたが、油断したうえ、寝込みを襲わ

れて応戦もままならず崩れはじめ、散り散りに敗走を始めてしまった。

残すは鎌倉のみとなつたが、鎌倉は南は海に三方は深い谷に囲まれ天然の要害となつていた。鎌倉に入るには七つきり通しである口があつた。

義貞は六万にも膨れ上がつた大軍を三手に分けた。極楽寺坂には一万五千、巨福呂様に一万五千、化粧坂には義貞自ら三万を配して鎌倉を目指した。幕府軍も全軍を配置して新田軍を迎撃した。狭隘な切りとおしは守るに易く攻めるに難しい難所であり、激戦が続いた。圧倒的兵力を誇る新田軍もその有利さを發揮することが困難であつた。

三日たつてもまだどこも抜けなかつた。しかやつと、極楽坂の幕府軍の抵抗が衰えた事を知ると、義貞は本隊を率いて極楽坂を目指した。丁度南には海岸線が見え、稲村ヶ崎が見えた。海は引潮になりつつあつた。それを見た義貞の腹心は注進した。

「この稲村ヶ崎は干満の差が激しく、潮が引けばあの浜辺は十分通り抜けます」

「あいわかった」

というと、義貞は海岸めがけて踵を返した。配下の者はどつとそれに続く。そして、海岸につくや、下馬すると海上を伏し拵み竜神に祈りをはじめ、祈り終えると黄金つくりの太刀を海中へ投げつけた。海水は徐々に沖へと遠のいていった。

「おうー」

全軍が義貞の祈りが通じたことに感嘆した。義貞は再び馬上の人となり、通行できるようになつた浜辺を突進した。

幕府は終焉の時を迎えていた。北条高時は刻々と入る戦況にいらだつて、心と体が恐怖に打ち震えていた。死に対する恐怖は極限に達しつつあつた。側近らももはや最期と思いつつもどうすることもできず時は過ぎていく。

「早く御自害候へ」

と駆け込んできたのは、長崎高重であつた。高時は苦し紛れに盃を手にしていた。その言葉を聞いた高時の盃は揺れていた。

「高重、お先に腹を切り手本をお見せいたします」

高重は高時の持つ盃をとると、三度飲み干して、摂津道準の面前にその盃を置き

「これを見てましたまえ」

と叫ぶや、腹を横一文字に搔つ捌き、腸を引きずりだして果てた。

道準は元々下戸であったが、盃を手に取り

「よい肴であつた。いかなる下戸も飲みたくなる」

と、酒を盃から半分ほど飲むと、腹を十文字に切り、絶命した。

高時の顔面は蒼白となり、全身で震えていた。周りでは腹を切る光景が段々増えていった。一五歳になる長崎新右衛門が祖父長崎入道の前にかしこまり、祖父の脇腹を二刺しし、その刀を返して自らの脇を刺し、祖父を抱きしめるようにして絶命した。

この光景を眼にした高時はやつと覚悟を決めたのか、刀を抜くと腹を開いて刃をつき立てた。苦しんでいる高時を見た重臣はその首をはねた。一門の自決者は二八三名にも及んだ。鎌倉幕府はついに滅亡した。

これで、後醍醐天皇が望んでいた親政がやつと来ようとしてたが、行く手にはまだまだ色々なことが待っていた。正成は都に向かっていた。

九 足利尊氏と護良親王

船上山に座していた後醍醐天皇は六波羅滅亡を聞いて、京都へと向かつたがその途中で鎌倉幕府滅亡の急使の知らせを受けた。早速光厳天皇を廢帝とし関白鷹司冬教以下の官を解き「正慶」の年号を「元弘」に戻した。

兵庫の福嚴寺から出立する前に楠木正成が帝の元を訪ねてきた。

「帝、此度の功労者の一人、楠木正成がただいま御氣色伺いに参上いたしました」

「おお、楠木が来たか。たちにこゝもとへ」

「はっ」

正成が帝の前に罷り出でてきた。

「帝、お久しううござります。幾たびの苦難を経ながらも、息災の様子、御安堵いたしましてござる」

「おうおう、都に戻るまでは病などに負けてはおれぬ。やつとわが思いが成し遂げられたというもの。これも正成らの与力の賜物じや。礼を申すぞ」

「勿体のうございます。我らはただ乱れた世をただし帝に返上したかったまでのこと」

「さて、今より都に戻り早速に政の準備をいたさねばならぬ。そちにもまた一役かつてもらうかも知れぬ」

「いえいえ、政をまかせらるる人物は数多ございましょう。ましてや足利の御大将は此度の功労者でありましょう」

「そもそもそう思うか」

「御意」

後醍醐天皇は満足そうな笑みを浮かべ頷いていた。

尊氏は六波羅探題を滅亡させ、鎌倉幕府崩壊の知らせも聞き、天下がひしひしと自分の足元に近づいてくるのを感じていたが、まだ、天下を治世する挙には出ようとはしなかった。まずは地盤固めである。京の都はいわば無政府状態であり、自らの力を世にしめす絶好の機会と考えた。

「六波羅に奉行所の看板を立てよ。のちのち恩賞に預かりたい輩は判を押す故罷り越されよ」

とのご沙汰を通達すると、近隣諸国の武士達は奉行所に殺到し、功名手柄を言上し承了判を求めた。まさに、総指揮官の行為のようにふるまつっていた。

都に帰還した後醍醐天皇は直ちに御所に入り、尊氏を呼び寄せて、幕府崩壊の立役者としてのお言葉を賜り、内昇殿の勅許、鎮守府将軍となつた。後には、従四位下左兵衛督となり、武藏守に任官され、名も高氏から尊氏と改めた。

楠木正成は摂津河内両国の国主守護となり、従五位下に叙せられ、新政府の記録所の寄人となり、天皇の側近としての任に就いた。

鎌倉幕府呪詛で鬼界島に遠島配流となつていた文親は解き放たれることになり、羅親が迎えにいった。都に帰還した文親は僧正に昇進し、東寺大勧進の任にもついた。

しかし、足利尊氏の飛躍を快く思わぬ人物がいた。討幕運動に心血を注いでいた護良親王である。父、後醍醐天皇の為に幕府と戦い続けてきたのに、世の討幕の功績は尊氏一人のもののように評価されていた。このままでは、また同じ武士が政権を持つことになり、結局二の舞になるのではないかと懸念したのである。ゆえに、都には入らず、大和信貴山の毘沙門堂に籠もつたのである。

そのため、後醍醐天皇は親王を慰撫するために使者を送り、都に戻れば征夷大將軍に任官するとの条件で、親王は都に戻った。だが、尊氏の声望は日に日に高まるばかりで、天皇の親政も批判がたかまつていた。親王はこのままほつておけば、朝廷にとつて脅威となると考え、密かに尊氏討伐の令旨を送っていた。

その密書の存在をしつた尊氏は自分の思惑の瘤的存在を感じ、後醍醐天皇に天皇の帝位簫奪の恐れありと奏上し、天皇は止む無く親王を捕縛して、鎌倉に流された。翌年、鎌倉で勃発した北条時行の乱の鎮圧の際に、尊氏の弟直義の命により、親王は暗殺された。

世情は混沌を再び見せ始め、新田足利の対立により、再び戦乱が始まろうとしていた。

十 尊氏と義貞

後醍醐天皇の治世はなかなか安定しなかつた。忠臣として仕えていた万里小路藤房は絶望のあまり出家出奔してしまった。そんな折、朝廷から謀反が生じた。西園寺家は北条氏と強い絆で結ばれた関係にあつたため、鎌倉滅亡後、自邸にかくまつて北条高時の弟泰家を奉じて挙兵し、さらに信濃に逃れていた高時の次男時行を大将とする軍を興して、鎌倉へ進撃し、政權を奪還する企てを図つたが、密告により、西園寺公宗は捕らえられた。

しかし、時行は挙兵し、数万の軍勢をもつて甲斐から武藏そして鎌倉へと向かつた。當時、鎌倉には尊氏の弟直義が成良親王をいだいて在陣しており、数度にわたり北条勢を迎撃つたが、いずれも敗北して、直義は三河まで一旦退いた。三河は足利の領地が多くあり、そこで兵を微兵し、使者を京の尊氏の元に送り、救援を乞うた。

尊氏は北条時行を討伐するために東下する許可を天皇に求め、総追捕使と征夷大將軍に任せよと要求したが、天皇はこれを却下した。逆に鎌倉にいる成良親王に征夷大將軍の称号を与えたのである。尊氏は止む無く許しのないままに数百騎を率いて京を立つた。この報を聞いた天皇は慌てて征東將軍の称号を与えた。

三河に着いた尊氏は直義と合流した。その時には三万の軍勢に膨れあがっていた。

「足利尊氏大軍を率いて東上す」
の報告は鎌倉の北条時行の元にもたらされた。

「古来より先んずれば敵を制す」

との思いから、名越式部大輔を大将として二万騎の軍勢を出発させ、遠江国浜名郡橋本で足利軍と刃を交えた。十数度にわたる合戦の末に、北条軍は壊滅して鎌倉に敗走した。そして、残る主だった武将はあいついで自刃して果てた。大将時行もその中にいたと思われたが、実際は脱出していった。尊氏は鎌倉にはいり、腰をすえた。後醍醐天皇は帰京命令を出したが無視し、新田義貞の領地を恩賞として諸将に与えていた。

後醍醐天皇は鎌倉に居座る尊氏が新たな政権を樹立することを鑑み、成良親王を上將軍

とし、新田義貞を大将とする尊氏追討軍を編成して、東下させるとともに陸奥にいた北畠頼家にも討伐令を下した。

東下した新田軍は三河矢作で高師泰の軍と対戦するが、高軍は兵も少なく勢いに乗る新田軍に翻弄されて敗北を喫した。箱根で直義率いる部隊が迎撃したが、新田軍の攻撃を支えきれずについた。尊氏は謹慎を装っていたが、直義敗北の報に接して、天皇との対決を覚悟して、全軍を率いて鎌倉を出立し箱根で新田軍と合戦に及んでこれを打ち破った。

新田軍は戦意を失い、京へと逃げるが、尊氏軍も勢いに乗じて京へ目指した。建武三年（一二三六）正月には足利軍は京へ入つた。この前には後醍醐天皇は洛中での合戦は不利と考え、側近に守られ叡山に行幸し、楠木や名和などの有力武将も召集で集まつてきが、その兵数は尊氏軍に比べれば僅かであつた。頼むは奥州より馳せ参じるであろう北畠軍であつた。

「正成、北畠はまもなく到着するであろうな」

「帝、わが物見からの知らせでは明日の夕刻にはこの坂本に着くのはと」

「おう、明日の夕刻か」

「北畠殿の軍は奥州でも精銳中と精銳と聞き及んでおりります。尊氏といえどもそろやすやすと打ち破れますまい。いや、むしろもはや我らに勝ち目はないと覚えておれば、我らの勝ちでございましょう」

「うん。見ておれ！尊氏め」

北畠軍が到着した後、数日間兵の休養を図るとともに京都奪還の作戦を練つた。新田、楠木、名和の連合軍と北畠軍は京都を目指した。天皇方の攻撃を聞いた尊氏は軍勢を集めて迎撃に出たが、以外に多い軍勢に驚いた。

「まだ、後醍醐天皇に味方する武将がいたとは？何やつじや」

「あの旗印は北畠家のものと見受けます。大将は頼家かと」

「北畠といえば、奥州におるのではないか？ええい、敵は寡少ぞ、一步も洛中にいれるでない」

しかし、よく訓練された北畠の騎馬軍團に足利勢は蹴散らされた。一旦散り散りになつた兵を集め、再度攻撃に向かわせるが、一蹴されてしまふばかりであつた。

四日間の攻防が続いたが、さすがの尊氏軍も兵も疲労極限に達し、その兵力も数えるばかりに減つていた。

「尊氏殿、ここは一旦兵を収め、丹波に向かいましょう」

「うむ、それもやむ得ぬ」

足利尊氏は全軍に領地の丹波まで引き揚げるよう通達した。天皇方は追撃するだけの余分な兵は持たないので、とりあえず京にはいり、戦いの疲れと負傷した体を癒した。

尊氏はしばらくすると丹波から兵庫に陣を移し、今度は四国の長沼氏や九州の大友、相良、島津らに軍勢催促状を発給して参陣を促した。が、勢いを盛り返した新田、楠木両軍は尊氏の陣営を攻撃した。尊氏はまだ勢力を戻しておらず、一気に九州での勢力回復を考えて九州へと逃れていった。しまらくは洛中に平和がよみがえった。

十一 尊氏再起

足利軍殲滅！尊氏九州へ逃れる！と聞いた後醍醐天皇はこれでもはや安泰であろうと喜びの言葉を皆を集めて述べた。しかし、反論するものがいた。正成である。

「帝、申し上げたきことがござります」

「どうした正成。申して見よ」

「はつ」

正成は天皇の御前に伺候して言い述べた。

「一言申し上げ奉る。是非に義貞を誅伐して、尊氏を召し返され、君臣和睦なされるがよろしいでしよう。御仕はこの正成がいたしましよう」

「何を帝に注進いたしておるのか！」

側近の一人が正成のとんでもない言葉に激怒して口をはさんだ。

「まあよい。正成いかなる存念か申してみよ」

「はい、帝が鎌倉北条氏を滅ぼされたのは、全く尊氏の忠功によります。義貞が関東を落としたのは事実であります。天下の諸侯はことごとく尊氏についてしまいました。この証拠には敗軍となつた足利には、在京の軍までもが扈從して遠く九州へと去つていつ、勝つたはずの天皇方を捨てました。これをもつてみても天皇方の徳のないのをお知りになるべきです。天下の人心は尊氏に傾いております。などってはなりません。よくよく考えてみれば、尊氏直義は中國九州の勢をうち従え、遠からず京都へ攻め上つてくるであります。そのときはもはや防戦する手ではありません。朝廷には深い思慮があるのでしょうが、武略の道においては、身分卑しき正成の申し分に間違いはございません」

「正成殿ともあろうお方が心弱氣ことを言いなさる。足利にこれ以上なにができるよう。のう皆の者」

「左様、左様、おほほほっ」

座にいるものは誰も正成の言い分を不思議な言い分として真剣に聞くものなどいなかつた。

「朝廷に刃向かった尊氏を召し返すなど笑止千万な戯言でござる！正成殿」

「それほど申さるるならば、これ以上は注進いたしませぬが、帝にはよくよくお考え遊ばされますように」

「さがつてよい、正成」

正成は一礼をして座を外して出て行つた。

尊氏は四国、播磨、安芸、長門の諸国にある足利一族に兵糧米や武具の準備を促す書状を送り、九州へと足を運んだ。途中備後鞆津で、光嚴天皇の院宣を受け取ることに成功した。このことは足利軍はもはや賊軍ではないことを意味していた。真正面から後醍醐天皇との戦いができた。

九州に逃れた尊氏としても油断にならない相手がいた。菊池を領する藤原一族の菊池武敏である。菊池氏は福岡の多々良浜に六千の兵を率いて陣を布いた。対する尊氏の手兵は僅か千余りであった。まだ、参陣を促していくも、実際はまだ尊氏の元にはついていなかった。尊氏は決死の覚悟で戦いに望んだ。案の定圧倒的な兵力の差に全滅の危機が迫りつつあったが、尊氏は起死回生の本陣攻撃を行なう。これが功を奏して尊氏は危機を脱出し、菊池軍を撃破したのである。尊氏は、あとは上洛する援軍が参集するのを待つだけであった。

院宣を受けたのが1月29日、援軍を集めて博多を出港したのが4月3日であった。尊氏は船で瀬戸内海を東に向かつた。その船の数は日増しに増え、山陽道を東上する陸上軍も日増しにその数を増していく。4月5日には鞆津に到着して船団の集合を待ち、戦備を整えた。

足利尊氏軍、院宣を奉じて大軍を持って東上す！

の知らせは京の後醍醐天皇をはじめ宮中を揺るがした。

「正成殿は」在宅か

楠木正成の京にある邸宅を訪ねたやつれ顔の仏僧がいた。

「羅観? どのか」

「はい、久しゅうござる」

「あまりに面影が変わったので気がつかなんだ。久しいのう。いかがしておつた」

「九州へいっておりました」

「九州?」

「はい、文親様にいわれ尊氏の動向を追つておりました」

「何とな、尊氏を追いかけていたとな」

「尊氏は陸路をとらず瀬戸内海を東上し、5日に鞆津に入りましてござります。数日はここに停泊して、軍備を整え一気に兵庫に上陸し、山陽道を東上する軍と合流するであります」

「しょう」

「鞆津まで来たか、してその兵の数は?」

「船の数は余りに多く遠くは霞んで見えません。数千艘はいるかと。海上に凡そ三万。陸上軍は十萬を越すものと思われます」

「うん、よくもこんな短い間に大軍を集めたものよ。尊氏でなくては集まらぬ数よ」

「正成殿、策はござるか」

「難しいのう。此度は幕府の時は違うと考えねばならぬ。あの時は幕府軍には戦をする気力が喪失しておつた。だが、今度は違う。でもやらねばなるまい」

「頼みは正成殿、貴殿しかおらぬ」

正成は、尊氏との戦をどう戦うか思案をめぐらせていました。

十二 決戦 淀川前夜

正成は一度後醍醐天皇の元を訪れた。もちろん、天皇の側近らも同席している。

「正成、思うがまま足利を食い止める策を申してみよ」

「恐れながら申しあげる。尊氏の率いる軍勢は雲霞の如き勢いがござります。それに比べれば新田軍をはじめ連戦にて疲弊しきつており、尋常な合戦では万に一つも勝ち目はございません。この上は、義貞公を兵庫より呼び戻し、帝を護衛しつつ比叡山にご臨幸願いたく存知ます。この正成は河内にて兵を集め、淀川河口を塞ぎます。叡山と淀川の南北から

京を封鎖し、足利軍の兵糧が尽きるのを待ち、一舉に攻めれば足利を打ち破ることができましよう」

「それができるか」

「この策以外には勝つ道はないかと」

「ちょっと待たれよ」

じつと聞いていた坊門宰相清忠が異議を申し立てた。

「正成殿の言い分もつともある。だが、尊氏征討のために遣わされている新田義貞が一度も戦わぬうちに、我々が都を捨て、帝が一年の内に二度までも比叡山に逃れられては、帝の尊嚴も失われ、わが軍の面目にもかかわりましょう。これまで味方は小勢ながらも大敵を打ち破っています。これはひとえに武略というより、帝のご運が天意にかなっているからです。ここは、敵を都へ引き入れず、都の外で滅ぼすことは不可能なことではありません。正成殿は時を移さず兵庫へ下向し、義貞と力をあわせ、足利を打ち破ることが先決であります」

この申し分に一同は賛同し、正成の進言は退けられた。正成は屋敷に帰った。

（京に足利を一旦いた後、包囲戦で殲滅する作戦は退けられた。京に入れてはならぬといふ。はて、いかなる作戦をたてたものか）

「誰か、絵図を持って参れ」

「は？」

持ってきた絵図は京から兵庫にかけてのものであつた。弟正季、嫡男の正行がその絵図を見ていた。

「足利は陸と海から攻めてくる。どこで待つのが最善か」

「兵庫の湊川から生田にかけての布陣しかあるまいと」

「うん、敵は大軍。ここしかあるまい。しかし、後はないぞ」

「承知の上」

「よし、出陣ぞ」

楠木正成は弟正季を連れて京を出立し、兵庫へと向つた。一同の中には正成の嫡男正行もいた。その数は八百にも満たなかつた。桜井に宿営すると正成はわが子正行を呼び寄せた。五月二十二日のことであった。

「父上、何事ですか？」

「よくよく考へてのこと。今から申し伝えることしかと守られよ。わしは此度兵庫で討ち死する覚悟で望む。今生でお前の顔を見るのもこれが最後のことであろう。お前はここから河内に帰れ」

「エッ？」

正行は帰れという言葉に驚いた。

「何を仰せられましようや。父上を見捨てて帰るわけにはまいりませぬ。どうか一緒にお供をさせていただきたい」

「よう聞け。正行！お前を帰すのは私のためではない。わしが討ち死にした後、天下は尊氏の世になるであろうことは明白。そのとき、誰が主上に尽忠申しあげる。一族郎党のうち一人でも残っているかぎり、金剛山に拠って朝敵と戦え。それが、お前がなしうる最大の親孝行だ」

「父上」

正行の眼には涙が溢れていた。しばらく考へた正行は返事をした。

「必ずや朝敵と戦います」

正成は黙つて頷いていた。その父の眼も涙で雲っていた。

正行は僅かばかりの護衛とともに河内に向かい、正成は弟とともに気合を入れ直して兵庫へと向かつた。二四日正成は兵庫へと到着した。正成と弟正季は休むまもなく新田義貞の陣を訪ねた。

「正成殿、おう正季殿待ちかねており申した」

「義貞殿、遠征の幾たびの戦いでさぞかしお疲れであろう。だが、此度は雌雄を決する戦いとなろう」

「正成殿、われら幾たびの戦で數多の有能な武将を失いましてござります。それに比べ尊氏には統々の新手が参じております。勢いに差があるのは歴然としております。このままではとても勝利は覚束ないと思ひます。しかし、このまま一戦を交えないで京都に退いたとあつてはあまりにも不甲斐ないことと存ずる。この際勝敗はどうであれ、この一戦に忠義を表すほかないと覺えるが」

「合戦的道理を知らぬものの言い分など気にされることはない。北条高時を滅ぼしたのも、

足利尊氏を九州へ追い落としたのも、新田殿の武力によるものではないか。勝敗は時の運。

「これを一番よく承知しているのは義貞殿であろう」

「それはそうだが」

「ここはもう後はござらぬ。悔いのない一番の戦をするまでよ」

新田軍はおよそ二万の軍勢を布陣していた。本陣を塙槌山に置き、主力を和田山、経島に脇屋義助、和田岬に大館氏明を配した。正成はその日の内に、西の会下山に本陣を構えた。沖合いの暗闇の海上には、足利の水軍が待機していた。陸上軍のほうも、山手、須磨口、浜手の三方から攻め込む手筈で布陣を完了していた。

十三 湊川

五月二十五日卯の刻（午前五時頃）、夜が白々と成り始めた頃、細川水軍が上陸のため動き始めた。これに呼応するように陸上軍も動き始めた。山手の大将は斯波高経、須磨口は足利直義率いる主力、浜手は少弐頼尚が率いていた。

楠木の物見が山手からこれらの動きを見て、正成に報告に走った。

「水軍は新田殿の退路を断つよう進んでおります。また、陸では三方より進軍しております」

「思つた通りの兵法じや」

「正季、そなたは背後に陣を構え、鴨越より来る敵に備えよ」

「はっ、兄上」

「だれか、新田殿へ注進に参れ」

「はっ」

「こう伝えよ。一步たりとも動いてはならぬ。策は練つていざる」と

しかし、伝令が新田軍の陣営に到着する寸前にもはや浮き足だった。細川水軍の一部が経島に上陸を行なった。いうなれば陽動作戦である。これは、脇屋隊が撃退したが、細川水軍はその後方に大挙上陸をする様子だと物見の報告が入った。退路を全く塞がれては一大事と、生田の森付近へと本陣を移動させた。この移動が混乱をきたした。最後の決戦には、これが死に場所と決めた正成とまだ先があるとあまい考へがあつた新田義貞との

思いの違いが、戦の行方を大きく変えた。

「申しあげます。新田殿、陣を払い生田の森へ本陣を移すようでござる」

「なにっ！」

正成はしまったと思った。戦略は最初で狂ってしまった。正成の布陣している会下山からは周囲が一望でき、遠くに東へと移動している新田の軍勢がみてとれた。海上の和田岬には、これ幸いと足利尊氏直卒の水軍が上陸をはじめていた。西を見ると陸上よりせまる足利軍がこちらへと向かっている姿が望見できた。楠木軍を包囲するように進軍している。(ここは我らが屍をさらせば本望というもの)

「皆を集めよ。輜をたてよ」

「はっ！」

『非理法權天』の旗が山上にはためいた。

「ここに尊氏殿との決戦の時がやつてきた。敵は雲霞の如く数じや。われら僅か七百。敵を打ち破るは遼二無二矛先の如く突進あるのみ。目ざす首は足利直義じや」

「オウー」

先鋒軍として葛城右衛門佐率いる三百、主力は正成自ら率いる四百、後衛は正季が三十騎で準備を整えた。正成は戦術を変えていた。正成の戦術は過去から見ると、ゲリラ戦による長期籠城を試み、敵を撹乱するにある。しかし、今回は山上より一気に駆け下りた。これには足利軍も予想を裏切られた。

「かれツ！」

僅か数百の楠木軍に前線は翻弄された。瞬く間に陣営を破られ、正成本隊は直義の本陣を目指していた。突いては返し十六度に及ぶ激戦を繰り返した。ふと見渡せば楠木の将兵は数えるほどに減っていた。だが、まだ敵の数は辺に溢れていた。しかし、半日に及ぶ激戦で敵も疲れ果てて、楠木軍を殲滅する余力はなくなっていた。正成はもうここまで尽力を尽くせば十分満足であった。最後の始末を考えるときを迎えていた。

「皆はようやつてくれた」

「兄上、あの民家に入りましょう」

正季は健在である民家にはいって再起を図ろうと思つた。

集まつた一族郎党は七十三人であった。生きていた者は少なかつた。いや、あれほどの激戦でかくも残つていたとは、たいしたものだという思いもあつた。鎧兜を脱ぐと、返り

血と傷口からの出血で全員が朱に染まっていた。戦いの喧騒から静寂の空間へ肉体が移動すると心も変化をきたす。

「正季、人間は臨終の一念で九界のいずれかに転生できるという。そなたはどう願うか」

正季は兄正成のいう一言一句を全身で聞いていた。

（兄はもう別の世界での事、来世の事を考えておる）

「七たびまで同じ人間に生まれ変わり、朝敵を滅ぼしたいと思います」

正成はその返答を聞いて微笑みの表情を浮かべた。

「罪業深い悪念ではあるが、わしもそう思う。ともに人間に生まれかわり本懐を遂げよう

う

「はっ」

正季は兄の言葉を心に刻み込んで、ゆっくりと刀を抜いた。正成も刀を抜いた。二人の刀はお互いの身体を貫いていた。

十四 桜花散る

鹿屋基地を飛び立つた野中少佐以下の陸攻十八機は零戦三〇機に援護され一路南下した。

何としても米機動部隊に一矢を報いたかった。その為に虎の子の桜花を使用したのだった。天気は雲が若干多いが、この雲が隠れ蓑となる攻撃日和でもあった。しかし、レーダーに発達でほとんど、敵部隊を確認する前にグラマンの迎撃に会い、落とされてしまうのが常であった。頼みの零戦も技量と性能の差で攻撃隊を護ることが容易ではなくなっていた。本来なら一トン魚雷を抱いて、米空母と刺し違えるだけの技量は全員持っていた。しかし、いかんせん空母の姿を見るか、見ても攻撃態勢以前に撃墜されてしまうのだ。桜花なら三〇°先から発進できる。艦隊の姿さえ発見できれば攻撃可能だった。

野中少佐は操縦席に座っていたが、脳裏にはソロモンの海に散つていった先輩や同期、後輩の多くの顔が浮かんでは消えていた。今眼前に広がるのは青い空と輝く海と攻撃に向かう荒鷺たちである。

（艦隊を見つけるまでは、グラマンよ現れるな）

心中で祈るばかりである。

桜花を吊下した陸攻はあまりにも速度が遅い。零戦は蛇行しながら警戒して飛んでいる。

キラツ！キラツ！

野中少佐は左前方に光るものを見た。よく見ると幾つかのゴマのような点が見えた。

「来たな」

副操縦士もそちらの方を見て確認したようだった。

(と、いうことは敵艦隊も近い)

零戦も敵機を確認したらしく、しきりにパンクをしている。そして、こちらに敬礼をしてグラマンの編隊に向かっていく。もう敵の姿ははっきりしており、その数はこちらの倍はいそうだつた。

敵艦隊を発見しなければ、桜花も発進できない。横を見ると、炎や黒煙をあげた飛行機が二、三機眼に入った。零戦だろうか。グラマンだろうか。確認している暇はない。

「やつた。やつたあ！」

後方でグラマンが落ちていくのを見ているのか、歎声が聞こえる。

「敵後方！」

尾部銃座よりレーシーバーに声が入る。グラマンが編隊の後方に位置したらしい。

「九番やられました。あつ七番も」

三機小隊三個で一個中隊を編成して飛んでいる。少し離れたところを第二中隊が飛行している。第二中隊もグラマンの攻撃を受けており、二機が煙を引き、編隊から離れていた。

今回の出撃では各機の武装は尾部の銃一挺だけであり、とても防御する代物ではなかつた。周囲を見ても見方の零戦の姿は少なくなっていた。

「このままで、全滅です。桜花を早く切り離しましょう」

「いや、まだ敵艦隊を見るまではだめだ」

「少佐！」

編隊の数は一機、また一機と減つていった。

その時である。前方の雲間にウエーキが見えた。

「敵艦です」

「うん」

「第二小隊全滅です」

残るは、野中少佐の第一小隊だけとなってしまった。

「敵グラマン後方より接近」

「敵の弾をこの機に集めるぞ」

桜花を吊るしていない少佐機は身軽でもある。二番機と三番機をやり過にして、後方に位置した。少佐は手話で桜花攻撃を行なうよう指示した。無線を使うのは突入をするときだ。

ダダダダッ！

右翼を弾丸がかすめていく。その内の何発かが翼とエンジンに命中した。ガソリンが漏れ出したのか噴霧状に出ているのがわかる。しかし、ほとんど使い終ったタンクなのか、すぐに止まつた。しかし、次の攻撃で衝撃を感じた。どうも尾部がやられ、水平舵、垂直舵がきかなくなつた。さらに、エンジンの調子もおかしくなつたかと思うと、右エンジンが炎を噴出した。二番機三番機をみると、桜花に乗員が乗り込もうとしていた。

「よし、ト連送を打て」

「だめですやられました」

「くそっただれ！」

無線機は弾の破片で故障したらしい。電信員も重傷だった。と、三番機が炎に包まれ、連れだした。

「早く出せ！桜花を切り離せ！」

少佐の目には敬礼する姿がしつかりと見えていた。そして、少佐機も胴体から出火し、高度は段々落ちていた。二番機もとうとう火達磨になり、桜花を発進する間もなくキリモミになつた。少佐機も操縦不能となり、海面へと突っ込んでいった。海上には油紋がいつまでも波間にただよっていた。

敵に一矢報いることかなわず、散華を遂げたのであつた。嗚呼時を越えて悲哀な最期であつた。

（完）

筆者註

この小説はただ純粹に殉じた人物への崇敬の思いで書いたのであり、軍国主義を愛顧して書いたものではないことを記しておく。

この小説を書くにあたり、以下の文献を参考させていただきました。

※
参考文献

歴史と旅「特集 大動乱！南北朝」 平成元年十月号 秋田書店

歴史と旅「特集 帝王後醍醐と霸王足利尊氏」 平成三年三月号 秋田書店

歴史と旅「太平洋戦争航空戦記」 平成七年臨時増刊 秋田書店

丸エキストラ 戦史と旅「特攻の記録」 平成十年七月別冊

歴史群像シリーズ㊱ 「戦乱南北朝【後天皇天皇、正成、尊氏の激闘】」

学習研究社